

## 動物たちの視点から考える

今年は、少数精鋭の年になりました。

寄せられた感想文の数は少なかつたものの、本当にすばらしい作品ばかりで、優劣を付けるのはほとんど不可能に近く、昨年同様、全員に「最優秀賞」を差し上げるべきである、という気持ちが無理やり抑えて、最終選考に取り組みました。

環境問題について「考える」時代はもう終わっている、と、私は、昨年の講評に書いています。その思いは一年後のきょうも、なんら変わっていません。

しかし、今回、みなさんが書いて送ってくれた感想文を読んで、私自身、新たな視点を再確認することができました。

それは、人間ではなくて「動物たち」すなわち「人間以外の生き物たち」の目で地球を見て、環境問題を考えていく、という視点です。

私はもともと動物が大好きで、好きな動物を殺して食べる、という肉食に疑問を抱くようになり、三十代の頃からベジタリアン（菜食主義者）になりました。命に感謝して、その命をいただく、という発想ではなくて、命に感謝しているので「ただだかない」という思想です。思想と食生活が一致しているベジタリアンは、日本ではまだまだあまり一般的ではないようですが、私の住んでいるニューヨーク州では、若い人たちを中心に、どんどん増えてきています。

今回、最優秀賞を差し上げたいと思った、市園ゆり佳さんの『ペットも人間も同じくらい大切な命』と、井上欄風さんの『生きものへの敬意と感謝』にも、まさに、そのような視点を強く感じました。

「ペットも人間と同じで一つの命をもっていると知りました」と書いている市園さん。  
「動物園は稀少動物の保護と野性復帰実現の場をめざしてほしい」と書いている井上さん。

そうなんです。動物は、人間の楽しみや喜びのために、存在しているわけではないのです。このことに気づけば、海洋プラスチック問題や、プラスチックのごみ問題も、すべて、人間が人間の快樂のみを追求しているせいで起こっているのだ、ということがわかってくるはずです。

粕谷春乃さんの『貧しいとは』の中には「目の前にある危機は地球環境の危機ではなく私たちの生き方の危機です」という言葉が紹介されています。もしも人間たちが生き方を改め、動物たちの幸せをもっと考えるような生き方をしたならば、北極のペンギンや白熊たちも救われるでしょうし、捨てられて殺される猫や犬たちもいなくなるでしょう。

小掠雪乃さんの『まじむこみてい（真心込めて）』は、スーパーマーケットで売れ残って捨てられている大量の食べ物や、見た目が汚くなって商品価値がなくなったバナナなどに目を向けて、環境問題を考えているところが画期的だと思います。

当然のことながら、大量に捨てられている食べ物の中には、殺された牛や豚や鶏も含まれています。動物たちは、売れ残って捨てられるために、その命を奪われなくてはならなかったわけです。またそのために、大量のエネルギーが消費されているわけです。

「命に感謝する」「食べ物に感謝する」と、言葉で書くのは、とても簡単です。

そして同時に、私たちがこのことを日々の生活の中で実践していくことも、実はそんなに難しくはないのです。

たとえば、犬や猫を捨てない大人になる（捨てているのは、いつだって大人です）。たとえば、食べ切れないほどの食べ物を買わない（買っているのも、生産しているのも、捨てているのも、大人です）。

こんな簡単などころから「命に感謝する行為」は始まっています。

動物に敬意を払い、その命を大切にすることは、そのまま、地球を大切にしていくことに重なっている。動物保護イコール地球環境保護である。

このことを、私はみなさんの感想文によって、再確認することができました。

みなさんの力で、大人を変えていって欲しい。

これが今、私が切に願っていることです。

(小手鞠るい)